

巻頭言

新春挨拶

理事長 田中 潔

平成16年の年頭に当たり、新春のお喜びを申し上げます。昨年前半は、新型肺炎SARSの世界各地への広がり、後半は鯉のヘルペスウイルス病の蔓延と、いずれもウイルスによる疾病の発生に驚いた年でした。樹木にも様々なウイルス病が知られていますが、幸い、壊滅的な被害をもたらす劇症性のものは今のところありません。しかし、地球温暖化をはじめとする環境変化に対応して、いつどのようなものが出現するか予断を許さない状況です。また、中近東地域の政情不安は越年となり、今年も厳しい1年になることが予想されます。



暗いニュースの多い中で、昨年11月には、世界的にも32年ぶりの快挙となる人工降雨による土石流発生実験に森林総合研究所が成功するという明るいニュースもありました。職員一同が地滑りが起こることをかたずを飲んで待っていたところ、実験開始から7時間後、人工降雨のもとになるタンクの水がなくなる寸前に斜面崩壊が起き、夕刻のテレビでは各社が、その劇的な映像を流しました。

さて平成16年は、独立行政法人化後4年目に入ります。5年間の中期目標期間の4年目は大変重要な年になります。それは、昨年8月に、「中期目標期間終了時の独立行政法人の組織・業務全般の見直しについて」が閣議決定され、「次の中期目標期間の開始年度に係る予算に反映できるように」、評価が1年前倒しとなることが明らかになってきたからです。中期目標期間の最終年の平成17年に行う平成16年度の評価をもって、「事業の改廃あるいは組織形態」について、具体的な勧告が行われることとなります。これらのことを踏まえ、昨年秋には、5年間の終了時に中期計画がきちんと達成できるかどうかの見直し作業を行い、必要な点に関しては軌道修正をしました。

さらに平成16年は、第Ⅱ期の中期目標期間の研究戦略について検討を開始する年でもあります。農林水産技術会議が中心となって、農業関係の独立行政法人の研究戦略の基礎となる「新たな農林水産研究基本目標」の策定が進められています。この中に、森林分野の研究目標も書き込んでいきますが、これとは別に、平成13年に林野庁が作った「森林・林業・木材産業研究・技術開発戦略」の見直しも行われます。第Ⅱ期の中期目標期間に重点的に取り組むべき研究領域と課題を明確化し、この「新しい森林・林業・木材産業研究・技術開発戦略」に反映させていくことが求められています。

平成16年11月には、森林総合研究所は創立99周年を迎えます。100周年まであと1年。森林総合研究所は、水文観測や収穫試験地の調査等、時間をおいてはじめて意味の出る貴重なデータを積み重ねてきました。100年という長い年月の中で蓄えてきた財産を、短い5年ごとの中期目標・中期計画に生かしていく必要があります。

様々な作業が錯綜するこの1年は、森林総合研究所にとって重要な年になると思いますので、関係各位のご支援・ご協力をお願いし、新春挨拶といたします。

[\[巻頭言\]](#) [\[解説シリーズ\]](#) [\[報告\]](#) [\[おしらせ\]](#)

[\[所報トップページへ\]](#)